

術後の生活について患者様からの質問集

心臓血管外科部長 大橋 壮樹

明けましておめでとうございます。皆様お変わりございませんでしょうか。2003年も皆様にとって幸多き年となりますようお祈りいたしております。

さて、退院後の質問集も第3回目となりました。よく受ける術後の質問について解説をさせていただきます。

【退院後の質問集】

1. 手術後、時々体調に変化があり腰部に鈍痛をきたすことがありますが大丈夫でしょうか？

手術内容、患者様の状況により個人差はありますが、手術2ヶ月程度は体調の変化を認めることがあります。無理をせず、かつ体調の良いときは少し運動を行いながらリハビリをしていただければよいと思います。心臓の手術後で特に腰痛の鈍痛をきたす事はありません。入院中ベッドでの生活が長かったために、筋肉を使わなくなり、退院してから筋肉痛等が出ることもあります。

2. 手術前、飲んでいた「養命酒」や自家製の「梅酒」等のアルコール飲料はいつころから飲むことができますか？

アルコール類は術後3週間以降と術後の生活例には記載しておりますが、その頃よりたしなむ程度から始めて下さい。

3. 狭心症の手術をして無事に1年が過ぎました。薬はあとどのくらいのみ続けなければいけないでしょうか？

手術の内容、術後の経過によりますが手術後の狭心症の薬は基本的に再発防止の予防的のものであります。海外では術後1年経てば、薬は中止しておりましたが、日本では高血圧、糖尿病等の薬と同様服薬を続けることが多いと思います。調子が良好な場合、術後1年以上経てば薬を減らしていくように主治医の先生と相談してください。

4. 仕事は？

手術の回復にもよりますが、デスクワークなら3週間以降、軽作業なら1ヶ月以降で可能です。本来の仕事の復帰は2ヶ月を目安としています。

5. 運動はどうすればいいですか？

術後の運動は、回復を促進し、再発の予防にもなりますので、是非おこなってください。運動は、ジョギング程度で1日30分以上は必要と思います。2ヶ月以降は本来の趣味の運動、スポーツは可能となります。

6. お酒は飲んでも大丈夫ですか？

手術直後は、貧血、脱水も少しあり、お酒が回りやすいので控えて下さい。手術後3週間以降であればビール1杯からたしなむ程度で開始してください。お元気になるまでは、アルコールは御自身の適量にあわせていただければ、問題ないと思われれます。

7. 旅行は行けますか？

手術後1ヶ月以降であれば、旅行は可能と思われれます。車の運転は2ヶ月以降からお勧めします。2ヶ月以降は温泉も可能です。

8. 再発はしないのでしょうか？

狭心症で、冠動脈バイパス術を行った場合、別の場所が再発したり、バイパスをした血管が詰まったりすることもあります。手術後1年以内に再発してカテーテル治療を受けられる方が1～2%いらっしゃいます。10年以内に再発する患者様は、10～30%といわれていますが、必ずしも再手術する必要のない場合もあります。心筋梗塞を起こされた場合、傷ついた一部の心臓はバイパスをして血のめぐりを良くしても全く元に戻ることはありません。しかし程度によりますが、心筋梗塞が再発する危険性は低いと思われれます。手術後は動脈硬化を予防する生活習慣に気をつけていただくことが大事と思われれます。再発したとしても、早期発見、治療によりお元気に回復されると思われれます。弁膜症、大動脈瘤手術後の再発に関しては次回にお話しします。

9. 造影検査は今後した方がいいのでしょうか？

狭心症で冠動脈バイパス術をされた患者様は、バイパスした血管が、良好に働いているかどうか、他に冠動脈の狭窄が進行していないかどうかを、チェックする必要があり、造影検査は将来必要となります。狭心症の症状がある場合はなるべく早く検査する必要がありますが症状が無い場合、約1年後にされることをお勧めします。他院からの紹介の場合、紹介先の先生の御指示に従ってください。最も大事なバイパス（内胸動脈バイパス）の血流は超音波検査で判定できますので、退院時にはその検査をして頂いております。

皆様がお元気で活躍されることを心からお祈り申し上げます。また、今後いろいろなお質問等ございましたら、当院までお気軽にお尋ね下さい。



体 験 談

「心臓弁膜症の手術を受けて」

長い間、心臓の薬を飲みつづけており段々と坂のある道などでは、息切れする事が頻繁に起こり、このままでは家族共に心配になり、かかり付けのお医者様より弁の動きが悪くなっているとの事で徳洲会への紹介状を書いて頂きました。

そして心臓カテーテル検査を受け、大橋先生より心臓手術が即刻、必要であると聞き、主人と3人の子供と一緒に先生の詳しい内容や、弁について説明を受けました。

弁には生体弁（フタ）と機械弁の2種類があり、私自身なるべく身体に負担の少ない生体弁を希望しましたが、必ずしも希望する弁が今の私の身体に合うとはいえないとの事で、手術はすべて、大橋先生を信頼してお願いいたしました。心配しましたが生体弁がなんとか合い手術も大成功でした。

術後、まもなく半年になります。この数年は心身ともに辛い日々でしたが、今はすっかり元気になり気持ちも身体も若返り毎日がとても明るく楽しいです。

これからは、大好きな旅行にも主人と行けそうです。手術して下さった大橋先生や大勢の先生そして看護師さん、お世話していただきとても感謝いたしております。

みなさまのおかげでこんなに元気になる事が出来ました。

河野

退院後も疑問に思ったり、心配していたことについて、大橋先生が本当に細かく、わかり易く具体的に説明されておりますので、安心して自信を持って生活することができますので有り難く思っております。

私は大腸癌手術のため、岐阜県立多治見病院へ入院し検査したところ、心臓の手術を先にする必要があるということになり、それについて、担当の先生方から「心臓手術については、当院より技術が高く心臓と外科の連続手術にも実績のある徳洲会病院を紹介します。」と言われお願いしたところ、早速手配をして頂き即座に転院いたしました。大橋先生が病室に見えられて丁寧な説明をされました。

2月22日に入院をし、2月28日に心臓のバイパス手術を受けました。引き続いて大腸の手術について、当院か県病院に戻るかどうかにはするかわいれ、徳洲会病院をお願いし、3月18日に横田先生の手術を受けました。

20日ばかりの間に、2つの連続手術を受け、心臓、大腸、双方共に経過も結果も極めてよく4月1日に退院することができました。

入院、手術を通じて私が一番印象に残り感じたことは、手術はともかく、視力がなく、不安定な気持ちの私にとって大橋先生は勿論、坂本先生、横田先生の人柄です。

親切的なコミュニケーションに人格を感じました。医学の技術は言う間でもなく、人格ある医師たちと出会い、心臓、大腸癌ともに完治したことに私は、喜びと誇りを感じ感謝いたします。

小栗 敏彦

私は胸がドキドキした為、近くの病院で診察を受けた所、僧帽弁狭窄症と心房細動の病気がみつき手術を勧められ徳洲会病院を紹介していただきました。長い時間をかけて病状が悪化したので私自身にはあまり自覚症状が無く、「何で手術をしなくてはいけないの？」というぐらいでした。

今はもう2ヶ月半になるうとしています。入院中は先生をはじめ師長さん、皆さんにはいろいろお世話になりました。師長さんより呼吸の仕方、体操、清潔、ソーシャルワーカーの方から費用の件といろいろ説明をうけてとても安心して当日を迎える事ができました。お蔭様でICU室からは3日が出ることが出来ましたが麻酔からさめる時は苦しかったように思います。一般病棟室に移って師長さんに「お帰りなさい！よく頑張ったね。」と声をかけられた時は、これで苦しさの峠は越えたんだという嬉しさと優しい母の様に涙がこぼれてしまいました。

食事もたくさんいただき順調に快復して2週間で退院でき、現在は月に1度地元の方へお薬をもらいにに行っております。これまで一生懸命働いてきたから神様が少しは休みなさいとお暇を下さったと思い、今はのんびり草花を作って楽しんでいます。

美しい花を見る時、こうして命を救って下さった先生や皆様に感謝し、1日・1日を大切に生きていこうと思います。

原 公子

「感動の大手術を乗り越えて」

毎日の日課として1時間半（約6キロ）歩くのが楽しみの1つでした。みょうに今朝は30分も歩かないのに胸騒ぎがして、かかりつけの内科医を訪ねました。降下剤の常備薬もそろそろ無くなる頃であったので診察していただくと心電図は前と変わりがないと言う事でしたが、念の為、専門医の紹介状を書きますからと言うことで徳洲会の門をくぐりました。担当にあたっていただいた大野先生が「今日はカテーテル検査をします。」と言われたのが10時半頃でしたが、その日は急患の方が多く検査室に入ったのは3時半頃でした。終われば薬でももらって帰れると軽い気持ちでいたところ、結果はその日のうちに入院と言う事になり、冠動脈3本共、先に行くに細くなりバイパスを3本とも作るという事で手術になり、正に頭の中は真っ白となりました。時、4月5日の金曜日でした。

明けて6日、8日と検査が始まり8日の昼から熱が出てきました。師長さんに「手術はいつになりますか？」と聞いてみると今週の金曜か来週になりますとのことでした。が、その夜、2回にわたり痙攣を起こしたそうです。その夜中1時半に家に電話が入り、少しばかりの熱でも明日手術をしましょうという事だったそうです。

明けて9日（火曜日）10時頃、麻酔担当の先生が病室に来られ、「加藤さん、私が麻酔担当ですが少しも不安はありません。安心して下さい。」と言われとても落ち着くことが出来ました。それから一刻も早く手術して下さいと言わんばかりに落ち着きを取り戻していきました。11時頃担当の先生に付き添われて手術室の扉をくぐりました。中扉まで行かないうちに気を失っていました。夕方6時頃、手術は無事に終わり家族は安心して帰ったそうです。それから何時間過ぎたのでしょうか。

当の私は集中治療室にいて、初めて気が付いたのは朝の3時頃でした。窓から日の光が眩しい程、それはそれはきれいな茜色だったのを覚えています。

近くの看護師さんに「おはようございます。」と第一声を出すことが出来ました。「気が付きましたか？まだ夜中です。朝になったら奥さんに会えますからね。」と言われて安心しました。朝、何時頃だったのでしょうか、大野先生と麻酔を担当していただいた先生がベットの横に立っておられ、「ありがとうございました。命を助けていただいて。」と伝え目頭が熱くなりました。家内も来てくれてとても嬉しかったです。

後でわかった事ですが私は4日間も眠り続けたそうです。気が付いた時は胸と両腕に、いっぱいのががついていました。それから3日くらい経ち管も取れて、集中治療室を出る頃は点滴の管ぐらいになりました。不思議にも痛みがほとんど無く、ハートセンター長の大橋先生の神業としか思えませんでした。個室へ戻ってからは、点滴を付けたまま用をたす事出来るようになりました。毎朝、大橋先生はじめ、大野先生、坂本先生、それに師長さんが笑顔で「今日はどうですか？」見舞っていただく度に勇気がわいてきました。手術から15日目には退院とまで言われ驚異としか思えず、あまりの早さに「私を見捨てるのですか？」と大変失礼な言葉をつい言ってしまいました。こんなに早く家に戻っても安心できないし、病院よりも不安が募るのではと思えたからです。「日に日によくなっていますから退院も早くなりますよ。」と言われ結局、手術から19日目の27日に退院することができました。

その間、1日中、看護師さん達の親切な手当と看病に頭が下がる重かったです。

我が家に戻ってからも日に日に自分でもわかる様にだんだん起きていられる時間が長くなりこの頃は、庭に出て草取りやちょっとした庭木の剪定も出来るようになりました。

これからは自分の命を大切に悪いところを見つけていただいた多くの先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

加藤 竹市

主人は退院して1ヶ月経ち、家庭生活がようやく慣れてまいりました。救急車で運ばれてから、11時間30分の長時間の手術が無事に終わって、主人の姿を見て言葉無くただ見つめておりました。集中治療室では先生、スタッフの方々の手厚い看護をしていただき安心して家に帰ることが出来ました。4回南病棟に移ってからも師長さんをはじめ、多くのスタッフの方々に大変お世話になりました。嫌な顔一つしないで親切にいただきたことは一生忘れません。

これから老後をすこやかに生きるために努力いたします。今では大変元気になり、小さな庭ですが、主人は杖もつかずに毎日歩いております。

匿名希望

冒頭にざいしまして高度の医療をもって誠の命をお与え下さいました大橋先生、卓越した治療を支えていただきました朝倉先生、坂本先生、真意より愛を申し上げます。地方医療行政の旗手として又、公開医療の先駆者として自負をもち更なる社会の貢献されますよう祈っております。県立多治見病院で1月下旬に胃の手術が予定されていましたが、最終検査のカテーテルで冠状動脈の閉塞及び狭窄2ヶ所あり緊急に手術要するとのことですがに動揺し血の気が失せてしまいました。県病院より大橋先生の紹介状を手にし急遽名古屋徳洲会総合病院へ飛び緊張と不安とが交錯する中、それは、1月9日のことでした。

病院窓口は丁寧にして且つ誠実な対応に戸惑いさえ覚えました。官民の相違でしょうか、心なみえました。

然るべき諸検査を終えた後、大橋先生より詳細な説明がありました。障害のある私にも充分理解し得ることができ、何の危惧も躊躇もありませんでした。むしろ不思議な安堵感さえ抱きました。

集中治療室は実に緊迫感が漂い、生命にたずさわる方達の目は輝き愛に充ちていました。林師長さんの適切な助言と24時間の献身的な看護にたずさわる方々に私の心までも癒されました。

会話の多い病床の生活は短いとも感じた40日間でした。回診の都度大きく深呼吸をし、鋭気を養い次の癌手術に備えました。病院での夜は殊更に長く、ファンタジックな夢をよくみました。新緑の映える木立に様々な鳥が競い歌う音楽を耳にして、澄んだ空気を精一杯吸って夜が明けると今日も1日のドラマが始まり枕元の小さなカレンダーを1枚めぐりました。40代半ばにしてパーチェット氏病と闘い五十路の坂は脳梗塞を背負い、古希を前にして心臓病と胃癌に挑戦し、誠に多彩な人生です。

人々に恵まれ天にも後押しされ今日にいたります。有り難きことです。

消化器外科の横田先生には度々病室まで来ていただいて恐縮の限りです。

大橋先生の御深慮により病棟の移動もなく現状のまま胃癌摘出の2幕を迎えました。術後2週間が経過し天馬空を翔けるが如し晴れやかに無事退院を果たすことができました。

感慨もひとしおでございました。

惜しみなく尽力下さいました皆様に再度感謝の念申し上げます。

ありがとうございます。

桑原 俊介

岐阜県中津川市民病院の主治医の先生より徳洲会にてバイパス手術をしてこいと紹介され家族とともに相談に来院いたしました。私が一番心配したのは高齢すぎて駄目と言われないかと思ったことです。最後に先生は決断はよいねと言われ、信頼と安心で力強くお返事しました。

世間のせわしさをよそに、手術は師走の20日、1時開始でした。諸先生のご説明と技術を信じ白きベットの上で家族と別れて何時間も過ぎ、うっすらと目を開けた際、今一体いつなのかもわかりませんでした。そして子供等の心配そうな顔がぼーっと見えてきました。私は口が利けず指で丸をうつつて見せると、子供たちはそれを見て安堵し各自私我真似をして丸を作ってくれました。その後特別の痛みもなく特別の苦しみもないが何事も口で伝えられない嫌悪感が3日間続きました。

1つ1つ機械をはずされるたび元の人間にかえられる気がしました。

ICU室から4日目に特別室に移され最後の機械をはずされた時、自由に自分で移動出来る幸せを感じました。最後に大橋先生をはじめ、諸先生方、スタッフの方々のご看護により手術後8日目、師走の28日に退院が出来、2003年の新春を迎えております。

本当に皆様ありがとうございます。

短歌・・・ 心臓に両足・片手の血管をバイパスとして手術終わりぬ。

・・・ 気がつきて薄目開ければ子供等の心配顔が並び居るなり。

・・・ 口利けず指で丸作り知るすれば皆うなずきて安堵の顔に。

山本 信夫

父の体調が日を追うごとに悪くなり近くの総合病院を訪れたのは昨年11月下旬のことでした。それまでも入退院を繰り返していた父でしたがさすがにこの検査結果には、本人だけでなくその周りの私たち家族、そして父の友人までもが言葉を無くすものでした。そして更に悪い事にその病院では、この手術をするのが大変難しいと先生がおっしゃったのでした。両親はその事を聞いた時に肩を落としておりましたがしかし、その先生から名古屋徳洲会総合病院で心臓血管外科の大橋先生と言うお名前をお聞きしてそして、その先生が父のような病気の患者さんを数多く治してこられたと言うことをお聞きいたしました。「大橋先生なら絶対に大丈夫ですからすぐに連絡をとりましょう。」と言ってくださりその場で、徳洲会病院の入院が決まり手術の日までもが決まりました。両親とも徳洲会病院の名前はよく存じておりましたが一度も診察を受けたことのない病院でしたので多少の不安を持ちながらも、転院をすませました。しかし、そんな不安は入院をしてすぐに消えていきました。それは、スタッフのみなさんがとても感じ良く、何事にもとても優しく接していただきとても安心できたからだと思えます。

入院してから手術の日まで3日という大変に短い時間でしたが、その間に不安は無くなりとてもリラックスした日を迎える事ができました。なかでも師長の林さんにはとても感謝しております。初めての大きな手術の前に何かと不安の中、医療に関して全くわからない私達に対してご自分の数多くの経験からいろいろ話をしてくださり、こちらが質問したことに対しては、とてもわかりやすく説明して下さいました。本人はもとより周りの人達の心のケアが単なる医療というだけでなく何かとても大切なことであることに初めて実感いたしました。そして先生や、看護スタッフの見守る中で大橋先生の手術は時間通りに終了し、そしてその後のお話を先生よりお伺いしたところ、大成功であるとのことと、手術前の計画よりもっと良い状態である手術が出来たことなど、色々話を下さったとのことでした。私はその話を聞いた時に母と2人で大橋先生にお願いできて本当に良かったと心から感謝をいたしました。先生の評判はとても良いものですがそれを改めて実感するものでありました。豊富な知識と経験を持っていらっしゃる先生は確かにたくさんいらっしゃいますが、その中でもトップクラスとお聞きいたしました。大橋先生にはどれだけ感謝をしても過ぎるということはありません。先生のおかげで父は今、元気を取り戻しました。そして、孫とも、とても楽しそうに話しが出来るようになりました。

名古屋徳洲会総合病院のみなさん、どうかこれからも数多くの患者さんをお元気にしてさしあげて下さい。そして、皆様も何時までもご健勝でますますの発展をお祈りいたしております。

桑山 重義

いつの頃からか、日常的に胸の痛みは繰り返されていた。8月22日、妻に付き添いを頼み、ホームドクターの田島医院を訪ねた。医師は心電図を見るなり「狭心症の疑いがありますね。」と軽く診断を下した。設備の充分な大病院で、更に詳しい検査が必要だと思った。妻とどこの病院にするかで議論を始めた。妻はどちらかといえば新装の市民病院派だった。私自身にはもう一つ、名古屋徳洲会総合病院という選択肢が残されていたが、優劣を判断する材料は何もなかった。

夕方近くになって、東京に居る長女からファックスが届いた。パソコン画面から採録された名古屋徳洲会総合病院のプロフィールが数枚あり、心臓血管外科に若き名医ありと結論づけられていた。「娘の勤める徳洲会でとりあえず検査だけ受けてみよう。」と私は決心をした。

8月23日、運命の日になることも知らずに、私はJR電車を高蔵寺駅で降り、徒歩で妻と名古屋徳洲会総合病院を始めて訪れた。新規の外来受付を済ませ、中の待合室へと進んだ。「これからどうなるのだろう？」私は不安で一杯だった。問診表には率直な表現で（胸上部に圧迫痛あり）とだけ書いた。順番がきて診察ブースに呼ばれた。「おそらく心筋梗塞が始まる寸前ですよ。」若い医師はいささか断定的な言い方をした。新しい血管で、冠動脈にバイパスを作れば当分安心してくられますよ。即日入院で即日手術はどうですか？」医師は熱心に説得された。私は妻と相談はしたが、そこまでの心の準備はしていなかったから迷った。入院の費用をどうするのか、もしもの場合のために遺言状も書いていない。書いていない慌てふためいた拳句、結局は医師の熱心さに押し切られる形で私は最後の決断をした。早速、手術着に着替えた私は、ストレッチャーでICUに送られ、レントゲン、心電図等の最終チェックを受けた。途中から一旦家に帰り、待機中のはずの妻と連絡がとれず、次女の嫁ぎ先経由で連絡をとってもらうこととした。

夕方、ICUには一瞬の平穏が訪れていた。やがて麻酔が効きはじめ、私は暫時この世におさらばするために、そのまま奈楽の底に引き込まれていったようだった。

翌日、唇近くなってから私は蘇生したようだ。「大野ですが、わかりますか？」執刀医が顔を寄せて、覗き込んでいた。7時間以上の難手術が成功して、私は再びこの世に生き返ったことを意識した。「ありがとう、我、生還せりですね。」思わず戦時映画もどきのせりふになっていた。とめどなく私の頬を熱いものが流れ、私は取り戻した「生」を大事にしたいと思った。

壇原 勇

大橋先生、名古屋徳洲会総合病院の皆さん本当にお世話になりありがとうございます。長年の心臓病よりうち切っていただけた様な気がします。昭和病院の加藤先生より、「このままでは死を待つより他にない。助かる道は手術より他にない。よく考えて返事を。」と言われ、本人は、元より私達家族も恐怖と不安におおるおおるばかりでしたが、命は1つ、なんとしてももう一度元気にしてもらいたいとの思いでいっぱいでした。手術していただくことにしてから、あちらの病院、こちらの病院と頼んでくださったが、みな断られ身も心もずたずたの思いでしたけれど、徳洲会病院が助けてくださり、昭和病院まで大橋先生が病院の救急車で迎えに来て下さりその時ばかりは先生のお姿が神様のようなものでした。病院の集中治療室の皆様、また4階南病棟のみなさん大変ご親切にありがとうございます。30年も病みました心筋梗塞から逃れる事が出来、大橋先生、朝倉先生、4階南病棟林師長他、皆さんのおかげと心より感謝いたします。徳洲会病院のひとだすけの道に心よりお礼申し上げます。

大森 栄治

つい先頃、各メディアは我が国の平均寿命が世界一になったと報道しました。私は早速、厚生労働大臣官房統計情報部のHPから私の年代（77）の平均余命を読み出しましたところ、9年余りあることを知りました。9年という数字は考えようによっては長いようでもあり短くもありますが正直なところ、たったの9年かという落胆も否めません。ところがよくよく考えてみますと人間の無意識は死を認めません。余命が例え9年であろうと、5年であろうと数字には無関係に自分の存在が、ある日から突然亡くなってしまうとは考えられないのです。他人の死は客観ですが、己の死となりますと、そりゃあ意識の上では、自分の死後のことだとか、葬式のやり方とかそういったことは色々意識して話しますが、いざ土壇場になっても、自分の死は決して認めようとはしません。

ところで話は変わりますが、15、6年前のことです。ある機会GTTという検査を受けましたところ「あなたは完全な糖尿病です」と宣告されました。その時のショックはなかなか言い表せませんが、思うように食べられないという事は、生き物にとって決定的なダメージ（精神的に）で、思わず目が真っ暗になったような記憶があります。それ以来次第に順応して参りまして指示されたカロリーに慣れてきました。時々大きな脱線もありましたが、この糖尿病療養期間、通院は1日も休まず、時々自ら血糖値を計りドクターから示されたHbA1cやTCHOの数字に安堵し、毎日が楽しくあちこちを飛び回っておりました。しかし、幸運はそう長く続くはずがありません。悪魔がちらり、顔を出したのです。ある定期診察日のことです。かかりつけのドクターが、気まぐれのように、運動負荷試験をやってみよと言われ、実施しましたところ、心電図におけるV5と言う胸の左側の伝導部分でかなりの異常が見つかりました。それを診たドクターは、「こりゃあいかんがやあ」と、深刻な顔をして私の顔を横目でじろりと見つめました。

私は素人ながらその重大さに気付き口が渴いてしまいました。人間は命に関わるようなことがわかると、無意識のうちに色々な行動をとるようになります。私がこの名古屋徳洲会ハートセンターのホームページを探し出すのに、大した手間はかかりませんでした。

今までかかっている総合病院に紹介状を書いてもらい飛んできたのはそれから2、3日のことです。

心の中で、どうせPTCAでことが済むだろうとタカをくくっておりました。ところが、しばらくすると大橋先生が私の病室を訪れまったく無表情で日本の冠状動脈がそれぞれ75%、95%詰まっていると報告されました。その時、私の鼻から口元へ微かな震えが走ったような自覚があります。きっと大橋先生はこれを見逃すことはなかったでしょう。

家に帰ってからは、家内にも相談などせず即座即決し直ぐ林師長さんに手術日を選んで貰いました。

最初の話に戻りますが、私もしバイパス手術を受けていなければ、私の余命は平均の9年はおるか後何年あったことでしょうか。次第に癒えていく私の心の中に、大橋先生を始め、関係された多くのスタッフの先生達、それに看護師さんたちが囁いておられるであろう私への言葉がふと心に響きました。「これで私達のやることは終わりましたよ。これから先はあなたの出番なんですよ。」

田尻 晋

編集後記

昨年、10月に行われた術後の会にたくさんのご参加を下さりましてありがとうございました。私達ハートセンタースタッフは、皆様のご健康をお祈りし、今年も熱意をもって前進していく所存でございます。今年の術後の会での再会を心より楽しみにしております。

